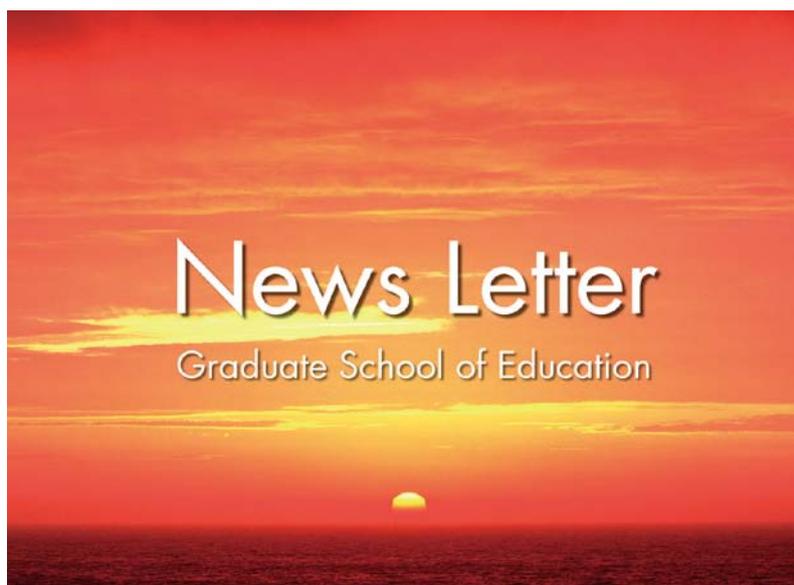


No.27



2013.12

## (目次)

- 巻頭言 . . . . . 副研究科長 鈴木 晶子 . . . . . 2
- 研究ノート
  - 教員から . . . . . 比較教育政策学講座 准教授 服部 憲児 . . . . . 3
  - 院生から . . . . . 教育方法学講座 修士課程2年 藤本 奈美 . . . . . 3
- 社会人院生から . . . . . 臨床実践指導学講座 博士後期課程2年 坂田 真穂 . . . . . 4
- 留学生から . . . . . 比較教育政策学講座 修士課程2年 郭 暁博 . . . . . 4
- 臨床教育実践研究センターから  
. . . . . 附属臨床教育実践研究センター 特定助教 中藤 信哉 . . . . . 5
- 教育実践コラボレーション・センターから  
. . . . . 心理臨床学講座 教授 教育実践コラボレーション・センター長 桑原 知子 . . . . . 5
- E. FORUMから . . . . . 教育方法学講座 准教授 西岡 加名恵 . . . . . 6
- グローバル生存学大学院連携プログラムから  
. . . . . 臨床実践指導学講座 教授 副研究科長 皆藤 章 . . . . . 6
- 平成25年度研究科長賞・学部長賞  
. . . . . 学生表彰選考委員会委員長 皆藤 章 . . . . . 7  
. . . . . 研究科長賞 教育認知心理学講座 博士後期課程2年 古見 文一 . . . . . 7  
. . . . . 学部長賞 関連教育システム論系4回生 黒岩 徳将 . . . . . 7
- 事務室から . . . . . 教務掛長 中尾 知里 . . . . . 8
- 図書室から . . . . . 図書掛長 奥野 雅子 . . . . . 8
- 諸記録 . . . . . 9~11
  - ①おもな出来事 ②入試結果 ③学位授与件数 ④人事異動 ⑤科学研究費補助金・外部資金受入
  - ⑥大学院入試説明会開催 ⑦オープンキャンパス2013開催
- 諸報 . . . . . 12
  - 新任教員・事務職員紹介

# 巻頭言



副研究科長 鈴木晶子

副研究科長を拝命してここ一年半あまりの間に、教育学研究科・教育学部の組織体としての、また、専門分野としての使命とアイデンティティや、将来展望を本部から求められる仕事を立て続けにありました。2012年6月には各部局の描く10年後の将来像についての意向調査「10年後の教育研究改革制度」があり、また、10月には部局の学部・大学院の教育活動に関する監査が入りました。2013年に入ってから、ミッションの再定義、平成25年度大学機関別認証評価、中期目標・中期計画の評価と立て続けに部局内でとりまとめ書類を提出すべき案件が重なり、関係する委員会委員の先生方、担当の事務の方々とともに作業をしながら、国立大学法人化から今年ちょうど10年という節目の年なのだと改めて思った次第です。

「世界的なレベルで、部局の強みと思われる点と、その強化に向けた将来構想について具体的にお示し下さい。

部局内の組織改編を検討する体制や、具体的な構想があればお示し下さい。

研究分野の硬直化は起きていないか、あるいは今後そうした懸念はないか、具体的にお示し下さい。」

これは、本学の教育研究組織改革専門委員会が行った熟議で、投げかけられた質問の一部です。2012年11月21日と2013年6月12日に、それぞれ1時間ほどかけて行われました。熟議は本学全体の組織再編を念頭においた部局への聞き取りと意見交換を趣旨とするものです。全部局への共通質問と併せて、それぞれの部局の設置時の背景や歴史的経緯、最近の教育研究活動データから、部局ごとに特化した質問もなされました。前掲の問いかけは、全部局に共通した部分です。

熟議の席上では、教育学部・教育学研究科の「組織体」としての存続意義にとどまらず、「学問=規律訓練化の集合体(ディシプリン)」としての存立意義に及ぶ質問もありました。担当理事をはじめ、専門を異にする当該委員会の方々理解していただける形で、短い時間にどう伝えたらいいのか一、前平研究科長、皆藤副研究科長、吉井事務長とご一緒に臨んだ熟議は緊張に充ちた時間でした。

法人化の翌年、2005年から始まった運営費交付金の一律削減、同12月に閣議決定された「行政改革の重要方針」による2006年からの人件費削減など、削減の波は、遂に大規模な定員削減計画となって押し寄せています。他方、基盤的経費の目減りを補うための競争的資金の獲得が、組織体の存立自体を左右しかねない状況です。知識基盤社会といわれる時代に、大学はいわば産業技術人材の養成機関として、「知」的財産の創出と防衛を担う場であるとして社会の期待が高まっています。国際競争に勝ち抜くためには、イノベーションを導く「知」の産出が必要で、それには大学自体がまず国際競争力を強化すべきだという論理に行き着くのでしょうか。企業体としての大学には目に見える結果を出すことが求められ、その論理はまた、大学間での選択と集中だけでなく、大学内での選択と集中をも強めていくことになるでしょう。「見える化」可能な「知」を基準とした社会の論理は、大学の研究教育に関する成果だけでなく、学生の学習成果に対する見方にも浸透してきています。

こうした状況は状況として受け止めつつも、生き方の質を決めていくような世界との向き合い方など、これまで研究や教育を目に見えない形で支えてきたものを失うことだけは避けたいと最近しみじみ思います。短期的に目に見える形で提示可能な結果のみを成果としてカウントしていくファスト・サイエンスだけに偏らず、スロー・サイエンスもまた存在価値があることを伝えていきたいと思います。

また、「知」のあり方の変容という知識基盤社会への移行は、「知」そのものを研究対象とする私どもの専門分野に直接関わる大きなテーマだと思います。「人間は変化する、変わることができる」ことに注目し、隣接する人間諸科学と共同する学として成立してきた私どもの専門分野は、視点やアプローチの多様性を活かした学際性が特徴です。異なるアプローチ法への寛容さとこの「懐の深さ」が、人間理解への道を深める原動力であったかと思えます。この原動力を次のステージへとさらに推し進めていく糧としていければと願っています。

# 研究ノート

## 教員から

比較教育政策学講座 准教授

服部 憲 児



2013年10月1日付で着任いたしました。翌日にはもう授業が待っており、その後も全国学会の開催、研究費申請の書類作成と怒濤の3週間を過ごしました。ようやく少し落ち着いたかというところで、本稿の執筆依頼をいただきました。これまでの振り返り(反省)と今後の見通しを立てるのにちょうど良い機会を与えていただいたと感謝しております。

これまで、広島大学、宮崎大学、大阪教育大学、大阪大学で教育・研究に勤しんでまいりました。大学教育に関する研究という大きなくりでは一貫しておりましたが、その職場で要請される業務と自らのテーマとの間に折り合いを付けながら、柔軟に対応しつつ研究に取り組んできました。このことは評価いただいている点ではありますが、同時に反省すべき点でもあると思っております。

広島時代には数多くの高等教育研究者と面識を持つことができ、この領域における研究の基礎を培うことができました。宮崎時代には研究では黙々と欧文文献を読み進め、教育では課外

での学生指導(教採試験対策)に力を注ぎました。大教大時代には教育行政現場や教員研修に関わる機会を多く得て視野が広がり、続けてきた研究を学位論文としてまとめるヒントも見出すことができました。阪大では主にFD、授業開発、学生参加による教育改善の実践を担当することになりましたが、各大学での様々な経験(高等教育研究、学生対応、教員研修など)を活かすことができました。

そしてこの度、原点に立ち返る機会を与えられました。この間に積み重ねてきた知識と経験を活かして、取り組んできた大学教育の改善策に関する研究を発展させたいと思っています。改めて教育行政・教育政策の視点から、構成員(国・自治体・組織など)の意向の吸収、合意形成、意思決定を経て改善へと繋がる仕組みについて研究していきたいと考えています(乞う御期待)。

## 院 生 から

教育方法学講座 修士課程2年

藤本 奈 美



私は、教育学研究科とグローバル生存学大学院連携プログラムに所属しています。市民として「力」をもつことの意味、それを学校教育で支援することの意義と課題に関心をもっています。修士論文では、ある教育実践家による市民性教育の原理と方法を研究しています。博士論文では、「真正性」「自律性」という概念に焦点をあて、学校における市民性教育について考究を深めたいです。大学院連携プログラムで進める研究プロジェクトでは、南アジアの市民団体が、いかに自分たちの文化的、政治的文脈において「市民」という言葉に意味づけをし、人びとが市民としての「力」を増すことを支援しているのかを明らかにするため、南アジアと日本の市民団体や研究機関と協力し、調査と会議を実施しています。

今日、社会はグローバル化しているといわれます。この社会変化を意識して、日本の大学には、「グローバル」を冠した多くのプログラムがあります。また、世間には「(TOEFLで測る)高い英語力を備えた」、「グローバルな(経済)競争で戦える」「人材の育成」を教育に求める声もあります。教育に携わる私たちは、

そのような目標を共有すべきでしょうか。そもそも、高い英語力とは何でしょうか。人びとは、本当に競争を必要としているのでしょうか。また、人を競争の材料として捉える「人材育成」が教育の場にもつ含意はどのようなものでしょうか。私は、「グローバル」と名のつくプログラムの一員としてこれらの問いを考えていきたいです。

京都大学の教育学研究科では、研究室ではもちろんですが、研究室をこえて、様々な背景と考えをもった先生方や学生から学び、共に思索する恵まれた環境があります。そこで今日の社会や教育について議論するなかで、短絡的に競争や英語力を人に求めることよりも、人間一人ひとりが代え難い存在であると認識し、多様な価値を尊重しつつ、それぞれが自分の「力」を発揮し、自由に生きることができる社会を建設的につくっていくことこそが、社会についても、教育についても重要だと私は実感します。これからも、この豊かな教育の場から教育に携わっていきたいです。

## 社会人院生から

臨床実践指導学講座 博士後期課程2年

坂田 真穂



私は、臨床心理士として、医療者のこころのケアを行ってきました。現在も、博士後期課程に在籍する傍ら、非常勤として850床規模の病院で、約2000人の職員のメンタルケアを担当しています。医療現場では、医師や看護師をはじめ、薬剤師、放射線技師、臨床検査技師、理学療法士、言語聴覚士、栄養士ほか多職種が働いており、職員相談では、それぞれの職務や職業文化への理解が、その傷つきの理解に欠かせません。そして、この仕事で最も喜びを感じるのは、彼らが、再びいきいきと患者にかかわる姿を目にする時です。

しかし、仕事を続けるうち私は、“他者を癒す医療者が、なぜこれほど疲弊してしまうのだろう”と考えるようになりました。特に、患者の最傍でケアをする看護師の疲弊や傷つきが目立ち、この状況への対処は急務であると思われました。実務の合間を縫って書物や文献にあたりましたが、先行研究にあるような、環境要因や社会的立場によるストレスだけでは説明しきれない要因があるように思えてなりません。そこで、実践で突き

当たった疑問に向き合い、先行研究に欠落している視点を探すため、本学にて研究を進めています。

また、私が所属している臨床実践指導者養成コースは、臨床における指導のあり方を学ぶコースでもあり、授業では、後進の臨床心理士への指導はもちろん、他の対人援助職へのコンサルテーションについても学ぶことができます。職員相談では、自身の不調だけでなく、部下の対応に悩む上司や、患者へのかかわりについて相談に訪れる職員も多く、授業でのディスカッションを通じて得た知を実践の現場に活かしています。

社会人として学ぶにあたって、経済的にも体力的にも、そして頭の柔らかさにおいても困難を感じることはあります。しかし、実践経験を理論に照らし、研究に反映する面白さや、講義や研究から得たものを即実践で活かせることは、社会人として学ぶ醍醐味だと感じています。

## 留学生から

比較教育政策学講座 修士課程2年

郭 暁博



日本での生活も今年で4年目を迎えて、京都大学の修士課程での勉強も2年目になりました。今年もあつという間にまた紅葉の季節です。木々の葉の鮮やかな色、空気の中に漂う金木犀の匂いに癒されます。去年入学時の興奮と不安な気持ちが秋の穏やかな雰囲気の中で落ち着いたことを思い出します。

私は中国の大学で2年間勉強して、3回生の時交換留学生として日本にやってきました。すでに中国で大学生活を送っていた私は、当時「中国式教育」と「日本式教育」に大きな違いがあることを強烈に感じました。その裏側には組織環境と組織文化に大きな違いが存在すると当初考えました。しかし、勉強するほど組織構造には類似点が多いことに気づき、それをもとに今の研究に辿りついたわけです。

京都に来た最初は、いきなり「学術の世界」に巻き込まれることに不安を感じ、落ち込んだりすることもありましたが、親切に指導をしてくださる先生、いつでも相談に乗ってくださる先輩たち、優しい仲間たちに恵まれて、今はとても幸せです。また

京大の自由な学風、豊富な資料は研究に絶好な環境です。この恵まれた環境に囲まれ、自分を充実させなければならないと実感しています。もちろん研究とは山登りと同じで、苦しみもあるし、楽しみもあります。今年、修士2回生の私は目の前に修論の山を乗り越える時期に迫られています。題目を「中国における大学院教育の質評価システムの現状と課題—ドビンズらのモデルをふまえた高等教育ガバナンスの検討—」として取り組んでいます。これまでに自分が勉強してきたことと研究してきたことを活用し、視野を広げることを念頭に置きながら、中国の高等教育の組織改善に役立つような研究成果となるように努力していきたいと思っています。

その目標を実現するには、これからも自分を深く磨きつつ、自分を支えてくれる周囲の人たちへの感謝の気持ちを持ちながら、研究に精進していきたいと考えています。

## 臨床教育実践研究センターから

附属臨床教育実践研究センター 特定助教 中藤 信哉



今年で17年目を迎えます臨床教育実践研究センターは、設立当初より一貫して、市民に開かれた心理教育相談室での心理臨床実践を活動の中心に据えてまいりました。またそれらの実践を通して得られた知を社会に還元する活動の一環として、毎年「リカレント教育講座」と「公開講座」を開催しております。

8月に開催いたしました第17回リカレント教育講座では、「家族への支援と対応」をテーマとして、シンポジウムと事例検討会を行いました。精神医療、心理臨床、教育の各領域の専門家の先生方をシンポジストとしてお招きし、家族への対応や支援について、実践に根差したお話をいただきました。当日は100名近い方々にご参加いただき、活発な議論がなされました。10月には、当センターの客員教授である Gustav Schulman 先生（フィンランド精神分析協会）を講師としてお招きし、「成人生活への子ども時代の経験の影響」と題した公開講座を開催いたしました。虐待等の幼少期のトラウマが成人生活へどのように影響するのかについて、最先端の研究と先生の豊富な

臨床実践を参照しながら講演していただきました。

また、平成23年に発生しました東日本大震災以降、当センターでは「こころの支援室」を開設し、支援活動を行っております。「緊急スクールカウンセラー等派遣事業」の枠組で京都大学医学部附属病院精神科神経科・京都府内の精神保健医療機関の医師・看護師の方々と合同で結成した「京都子どもの心のケアチーム」の福島での支援活動を、今年度も継続するとともに、関西地域へ避難・移住されている方々への支援プログラムも定期的実施しております。時間の経過とともに変化する状況を踏まえながら、長期的な視野で支援を継続していく必要性を感じております。

こうした当センターの活動を支えていただいている方々に感謝するとともに、今後ともご協力とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

## 教育実践コラボレーション・センターから

心理臨床学講座 教授 教育実践コラボレーション・センター長 桑原 知子



教育実践コラボレーション・センターでは、各教員がフィールドに関わりながら、実践に基づいた研究活動を続けておりますが、さらに、その成果を社会に還元すべく、「科学研究費補助金事業」への応募をおこなっております。

その結果、このたび「平成25年度基盤研究(A)」に追加採択されることが決まりました。本稿では、その内容について、お知らせしたいと思います。

研究課題名は、「学校を中心とする教育空間における力動的秩序形成をめぐる多次元的研究」です。

現在、校内暴力、不登校、学級崩壊、いじめなどの報道が毎日のようにみられます。そしてこれらは、学校教育の秩序を揺るがす問題だと定義され、それへの対応として、秩序から逸脱した人や状態をどのように秩序の中に回収するのか、乱れた秩序をどのように再び平衡に戻すのかということが考えられてきました。しかしながら現在、この前提が崩れはじめ、学校のみならず、地域・社会、家庭においても、これまでの秩序にもどせばいい、という

発想ではうまくいかなくなっているのが現状ではないでしょうか？グローバル化や電子メディア空間の影響もあって、既存の秩序への再編という戦略がもはや無効になっていると言っても過言ではないように思います。

そこで、今回の研究課題においては、学校、地域・社会、家庭、電子空間といった複数の空間での人々の相互作用の在り方を解明し、秩序のゆらぎがどのようなものであるかを明らかにするとともに、その中で、どのような秩序が動的に、新たに、立ち上がってくるのかということを探知しようと考えています。

これまでのコラボレーション・センターでの活動実績やフィールドとのつながりを生かしながら、現代の子どもをめぐる重要な問題に対して、なにかしかなの貢献ができることを願っています。

みなさま方のお力添えを切にお願い申し上げます。

## E . F O R U M から

教育方法学講座 准教授 西岡加名恵

E.FORUMは、2006年の設立以来、早くも8年目を迎えました。現在、E.FORUMは、大きく次の3つの柱で活動しています。

第1は、毎年8月と3月に行っている研修です。E.FORUMの研修は、講演やワークショップ、実践交流など、多彩な活動を組み合わせている点に特長があります。2013年8月には、講演「稽古のしなやかさ——世阿弥『伝書』における稽古の仕掛け」（西平直教授）、ワークショップ「思考力・判断力・対話力を育てる教材開発：総合博物館を探究する」（大野輝文教授（総合博物館館長）・石井英真准教授）、「カリキュラム設計：パフォーマンス評価の進め方」（西岡加名恵）などを提供しました。2012年度からは、京都大学で教師をめざす学生たちにも、研修への参加を積極的に呼びかけています。

第2は、E.FORUMの会員のネットワークを活かした共同研究開発プロジェクトです。E.FORUMでは、会員の実践資料を蓄積するデータベース「E.FORUM Online」を開設しています。そのデータなども活かしつつ、各教科における「本質的な問い」や典型的なパフォーマンス課題を整理した「E.FORUMスタンダード」の開発に取り組んでいます。

第3は、「E.FORUM教育研究セミナー」です。2012年度は、「大学で育てるべき教師の資質能力とは何か——『教員養成の

京都大学モデル』を探る」、「高大接続・大学入試の課題と展望」というテーマでシンポジウムを開催しました。2013年12月にも、「『教職の高度化』をどう構想するか」をテーマとした講演・シンポジウムを行いました。

E.FORUMについての詳細は、ウェブページ(<http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/e-forum/>)で公開しています。是非、ご覧いただき、研修・セミナーなどにご参加いただければ幸いです。



## グローバル生存学大学院連携プログラムから

臨床実践指導学講座 教授 副研究科長 皆藤 章

研究科を横断して自然科学・人文科学合わせて12の部局が「博士課程教育リーディングプログラム」を舞台にして「グローバル生存学 <http://www.gss.sals.kyoto-u.ac.jp>」という新たな学問領域を打ち立てようとする試みは、本学が採択されたこのプログラムのなかでトップバッターでもあり、部局間調整を丁寧に行いながら、さまざまな協力体制を構築してきました。そして、本年度ようやく「博士論文研究基礎力審査」についての申し合わせが決まり、本研究科でも1名がこの審査を受けることとなりました。本研究科からグローバル人材が養成されていくことは、非常に意義深いことと思っています。

自然科学の先生方と膝をつき合わせて話をするなかで、自然科学がいかにグローバル化を必要としているかを知るようになりました。もちろん、グローバル人材の養成は本学が掲げる学生教育の幹のひとつでもあり、本研究科もその必要性を認識

しているのですが、地球規模・宇宙規模でそれを志向するという自然科学のまなざしは非常に刺激的に感じています。

教育学研究科は、そうした学問領域のこれも根幹にある「教育」という領域でグローバル生存学における人材養成に貢献しています。本年度は臨床教育学講座の齋藤直子先生のご尽力で教育哲学の世界的権威であるロンドン大学教育研究所のポール・スタンディッシュ先生を外国人研究者として招聘することができ、自然科学の学生に「教育」についてレクチャーやディスカッションをする機会を提供することができました。

グローバル生存学は来年度、博士後期課程1回生を迎えることとなります。さらなる発展をご期待下さい。



## 平成25年度教育学研究科長賞・教育学部長賞

学生表彰選考委員会委員長 皆藤 章

平成25年度の教育学研究科長賞と教育学部長賞が決まりました。学生を表彰するというのは、教員にとってほんとうに嬉しいものです。しかも、この賞は教育学研究科・教育学部の名誉を高めた学生に贈られるのですから、教育学研究科・教育学部にとっても喜ばしいことです。選考委員長としての率直な実感です。

選考はまず、教員からの推薦によって候補者の学生が委員会に報告されました。推薦基準は「学業」「課外活動」「社会活動」「その他」の4つです。教育学研究科長賞の古見文一氏は「学業」、教育学部長賞の黒岩徳将氏は「課外活動」と「社会活動」の基準でした。選考は、規程に則り同窓会会長の伊藤良子京都大学名誉教授、鈴木晶子副研究科長、稲垣恭子教務委員長、駒込武学生委員長、そしてわたしの5名で行いました。全員一致で、お二人が選考されまして、結果を前平泰志研究科長・学部長にご報告致しましたところ、すぐに決定の運びとなりました。

では、受賞のお二人の選考理由を若干ですが紹介したいと思います。古見氏は教育認知心理学講座博士後期課程2年次に在籍しています。修士課程入学から起算すると研究活動は4年に満たない段階ですが、すでに国内外の一流の学術雑誌に研究成果が掲載されていることが高く評価されました。また、黒岩氏は高校時代に始めた俳句を追求し続ける、相関教育システム論系に所属する4回生です。大学間国際交流協定によってスウェーデンに留学中もその活動は活発で、句作のみならず俳句を通じて国際交流など社会活動を積極的に行っていることが高く評価されました。

選考委員会では、教員の推薦だけではなく自薦があっても良いのではないかという意見も出されました。また、教育学研究科・教育学部の名誉を高めたことをいかに評価するのかについて活発な議論が交わされました。次年度の選考に活かしていきたいと思えます。古見文一さん、黒岩徳将さん、おめでとうございます。

### 研究科長賞

教育認知心理学講座  
博士後期課程2年  
古見 文一



この度は研究科長賞という大変  
栄誉ある賞をいただけて、大変  
嬉しく思います。受賞を励みにより  
一層研究に邁進して参りたいと思えます。

私が、今回ご評価いただけるような研究を行えたのは、京大教育という恵まれた環境によるものと思っております。私が在籍している教育認知心理学講座では、4月の講座ガイダンスで毎年「院生は研究者の卵ではない」、「世界レベルの研究を行うように」といったメッセージが先生方から院生に贈られます。そのメッセージの通り、院生はハイレベルな研究、議論を行い、先生方は最大限のサポートをさせていただきます。また、私は修士課程では専修コースに所属しておりました。私は発達心理学、特に児童期の発達を専門にしておりますが、異なるバックグラウンドを持ち、異なる領域で研究している専修コースの院生と、教育や現場の子ども達について議論を行った経験は、現在の私の研究に生きています。

京大教育にいただいた大きなサポートを生かしながら、今後も世界レベルの研究を行っていきけるようにプロの研究者として努力していきたいと思えます。本当にありがとうございました。

### 学部長賞

相関教育システム論系  
4回生  
黒岩 徳将



今回、「教育学部長賞」という  
賞をいただき、たいへん光栄に  
思えます。

私は、16歳のころに俳句に出会い、その魅力を知りました。私に俳句を教えてくれた、俳人の夏井いつき氏は、「俳句100年計画」という言葉をかかげ、日本中の学校で俳句普及イベントを行ったり、メディアで俳句の面白さを紹介しています。

その精神に共感し、私は大学に入学してからも、俳句作家活動と、俳句を普及する活動の二つの軸を大事にしていこうと、様々な試みをしてきました。具体的には、石田波郷新人賞奨励賞という若手俳人の登竜門の賞を受賞したり、留学先のスウェーデンの日本人補習校で俳句を紹介するなどしてきました。

前平学部長から「名誉かなにかを得るためではなく、夢中になってそれに向かって突き進む姿こそが素晴らしい」という言葉をいただいたことが、何よりも嬉しかったです。インターネットで私の名前を検索すると作品がありますので、見ていただけると嬉しいです。

## 事務室から

教務掛長 中尾知里

平成27年3月の学位授与に向けての学位授与スケジュールは次のとおりです。  
平成27年3月博士後期課程修了予定者の指導教員の先生方は、ご指導よろしく申し上げます。  
なお、詳しい手続きについては、教育学研究科のホームページをご参照ください。  
<http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/yousiki/#kyoumu> (学内専用)

### ■平成27年3月 博士学位授与スケジュール

学位論文提出資格審査願提出	10月中旬			
資格審査結果及び調査委員の報告期限	11月13日			
資格審査結果報告及び調査委員の選出 (研究科会議〈予定〉)	11月20日			
学生への資格審査結果通知	11月21日			
学位論文提出	12月11日まで		1月15日まで	
調査委員の確認(研究科会議〈予定〉)	12月18日		1月22日	
論文試問	1月～2月			
審査報告書提出期限	1月15日	1月29日	2月12日	3月2日
学位論文の審査(研究科会議〈予定〉)	1月22日	2月5日	2月19日	3月9日

## 図書室から

図書掛長 奥野雅子



京大の所蔵している図書や雑誌を検索するKULINE(クライン)がリニューアルして、2年目、そろそろ使い方も慣れてきた頃かと思いますが、あらためて、素通りしがちなKULINEトップページについてご紹介します。

KULINEトップページ <http://kuline.kulib.kyoto-u.ac.jp/>とあり、キーワードを入れて検索してみてください。単語によってはサジェスト機能、その語に関連する語句がでるようになります。

なお、“指定された条件に該当する資料がありませんでした。…”

という悲しいメッセージが出たとしても諦めるのは、まだ早いです。目当ての資料が見つからない場合、入力したキーワードはそのままに、上のタブをクリックしてみてください。学術雑誌の目次(論題や論文著者)から探してくれる[論文検索]、他の大学図書館の所蔵を確認してくれる[他大学検索]、京都市・京都府立図書館などの公共図書館やアマゾンなど書店の資料も一気に探せる[横断検索]など、次々と検索先が切り替わっていきます。

京大の先生方が書いた論文なら京大術情報レポトリ[KURENAI]タブをクリックして探してみると意外と簡単にPDFで手に入るかもしれません。[貴重書資料画像]タブでは原本に出会えるかも。

KULINEキーワード検索窓の下側にも着目してみましょう。まず、MyKULINEへのログインボタンがあります。MyKULINEにはいろいろ便利な機能があることは前々号でご紹介しました。まだアクセスしたことがない方はぜひ使ってみてください。読みたい本リストが簡単に作成できるブックマークなどおすすめ機能が満載です。

さらにその下には[図書館機構][京都大学]のお知らせ小窓があり、[図書館機構][京都大学]タブを切り替えることで、それぞれのホームページに行かなくても、新着情報を確認することが

できます。

続いて、京大の各図書館/室で新たに入った資料が一目瞭然な[新着案内]、どんな本がよく借りられているかわかる[月間貸出ランキング]、それぞれの[一覧]ボタンをクリックすると月、半年ごとなど期間や所蔵館で絞り込むことも可能です。ぜひ、お試しください。[週間アクセスランキング][新着タグ][新着レビュー]というのも新登場です。

もっと詳しく知りたい方は「京都大学蔵書検索KULINEの使い方」

[http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/modules/refguide/docs/RefGuide\\_OPAC.pdf](http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/modules/refguide/docs/RefGuide_OPAC.pdf)

をご一読ください。

## 諸 記 録

### ◆ 2013年5月～2013年10月のおもな出来事

#### 【2013(平成25)年5月】

- 6日(月) 附属臨床教育実践研究センター内こころの支援室主催、京都大学大学院理学研究科附属花山天文台協力「花山天文台ツアー」(京都大学大学院理学研究科附属天文台花山天文台)
- 9(木)-10日(金) 北京師範大学教育学部との学术交流

#### 【2013(平成25)年6月】

- 29日(土) 教育実践コラボレーション・センター(教育空間創造ユニット)主催「野童いなか塾(初夏の自然観察会)」(京都府南山城村旧野殿童仙房小学校)

#### 【2013(平成25)年7月】

- 1日(月) 本部構内(文系)共通事務部業務開始
- 6日(土) 大学院教育学研究科、教育学部3年次編入 入試説明会(京都大学東京オフィス)
- 13日(土) 大学院教育学研究科、教育学部3年次編入 入試説明会(文学部校舎)

#### 【2013(平成25)年8月】

- 4日(日) 教育実践コラボレーション・センター(教育空間創造ユニット)主催「風と雲の広場(演劇ワークショップ)」(京都府南山城村旧野殿童仙房小学校)
- 8日(木) 教育学部オープンキャンパス
- 17日(土) 附属臨床教育実践研究センター主催「第17回リカレント教育講座『心の教育』を考える—家族への支援と対応—」(京都大学百周年時計台記念館)
- 17(土)-19日(月) 教育実践コラボレーション・センター主催「2013年度E.FORUM全国スクールリーダー育成研修」(文学部校舎他)
- 19日(月) 和歌山県教育委員会との連携協力 京都大学研修ツアー(那賀高校・橋本高校)

**【2013(平成25)年9月】**

1日(日) 京都大学総合博物館、附属臨床教育実践研究センター内こころの支援室主催「博物館ツアー～海って??～&和・話・輪の会」(京都大学総合博物館)

22(日)-23日(月) 大学院教育学研究科・ロンドン大学教育研究所第6回国際会議(京都大学百周年時計台記念館)

**【2013(平成25)年10月】**

6日(日) 附属臨床教育実践研究センター主催公開講座「成人生活への子ども時代の経験の影響-世代間伝達とそのリスクや防御因子-」客員教授Gustav Schulman氏(京都大学百周年時計台記念館)

**◆平成26年度入試結果**

・教育学部

日 程 等		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
前期日程	文 系	50				
	理 系	10				
第3年次編入学		10	20	20	6	

・教育学研究科

課 程 等		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
修士課程	研究者養成コース 教育科学専攻	18				
	研究者養成コース 臨床教育学専攻	14				
	教育科学専攻(専修コース)	10	32	31	9	
	臨床教育学専攻(第2種)	若干名	0			
博士後期課程 臨床教育学専攻(臨床実践指導者養成コース)		4	13	13	5	
博士後期課程編入学		若干名				

( )内の数は外国人留学生で内数

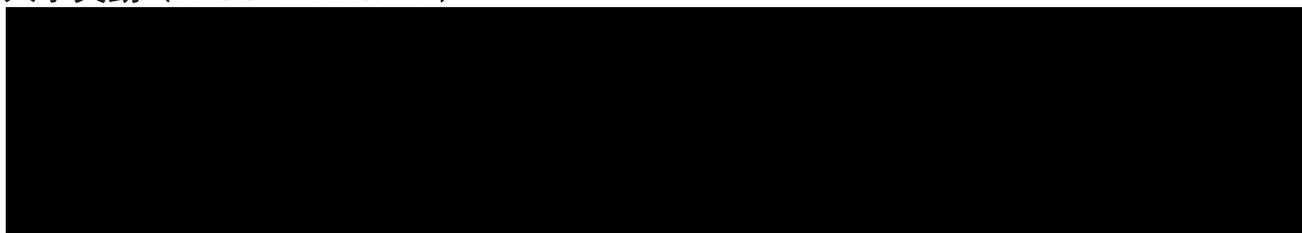
**◆平成25年度学位授与件数**

(H25.10.1現在)

学 位 名 等		授与者数
学士	教育科学科	
修士	教育科学専攻	
	臨床教育学専攻	
博士	課程博士	4
	論文博士	0



**◆人事異動 (H25.5.2～H25.11.1)**



平成25年8月22日付け  
 SCHULMAN, Gustav 外国人研究員（客員教授）  
 （附属臨床教育実践研究センター）採用

田邊 亜澄 研究員（科学研究）  
 （教育認知心理学講座）採用

平成25年10月1日付け  
 服部 憲児 准教授（比較教育政策学講座） 採用

## ◆ 科学研究費補助金・外部資金受入

### ◎ 科学研究費補助金

研究種目	研究題目	研究担当者
基盤研究(A)一般	学校を中心とする教育空間における力動的秩序形成をめぐる多次元的研究	桑原 知子

### ◎ 寄付金

名称・寄附目的	寄附者	担当者
(名称) ヒト衝動性への環境・遺伝子相互作用に関する研究 (目的) 同上	(財)阪本精神病理学研究所 理事長 藪本 雅巳	野村 理朗

## ◆ 大学院・学部第3年次編入学 入試説明会開催



平成25年7月6日(土)京都大学東京オフィスにおいて、平成25年7月13日(土)京都大学吉田キャンパスにおいて大学院及び学部第3年次入試説明会が開催された。

東京オフィスでは、14時から稲垣教務委員長からの歓迎のあいさつの後、山名淳准教授によるオープニングレクチャー「京都大学で人間と教育を探求する」、入試ガイダンス、個別相談が実施された。

吉田キャンパスでは、14時から稲垣教務委員長からの歓迎のあいさつの後、入試ガイダンスが行われ、大学院学生による個別相談が実施された。

いずれの会場でも、受験希望者が熱意を持って参加していた。

## ◆ オープンキャンパス2013開催



平成25年8月7日(水)、8日(木)の両日、「京都大学オープンキャンパス2013」が開催された。

本学部においては、8月8日(水)12時30分から実施し、432名の参加者があった。

当日は、前平泰志学部長の歓迎のあいさつ後、石井英真准教授による模擬授業、各系の説明と質疑応答が行われた。また、13時から16時まで学生相談員が個別に相談にあたり、高校生の相談に親身に応じていた。

参加者のアンケートからは、楽しかった、興味深かった、教育の概念を知ることができたなどの感想が寄せられ、好評であった。

# 諸 報

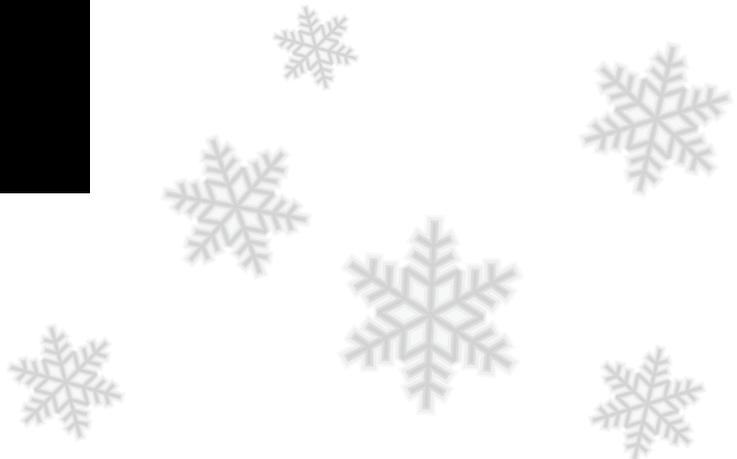
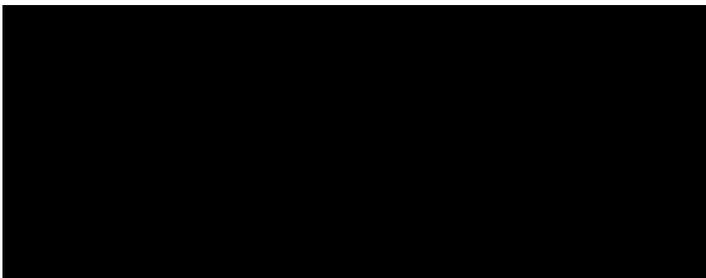
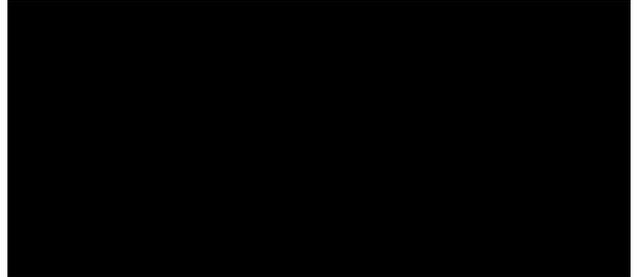
## ◆ 新任教員・事務職員紹介（「 」内は本人の抱負）



服 部 憲 児 准教授

所属講座： 比較教育政策学講座  
専 門： 教育政策学

「学生時代を過ごした京大に教員として着任いたしました。学部・研究科の発展に貢献できるように頑張りたいと思います。」



## ～ 編 集 後 記 ～

最近の大学では改革がこれまで以上の速度で進んでいます。高等教育を研究対象にする身としては、変わりつつある現実を自分の大学イメージとどのように整合させるか苦闘している毎日です。現代において大学が変革の大きな流れの中にあることは確かですが、矢継ぎ早の提案に立ち止まることもできず、進むべき方向を探してもがいているようにも感じます。これが好機なのか危機なのか、とらえ方は人によってさまざまでしょうが、その前提として、「知」を生産し、伝達する拠点としての大学のあるべき姿を改めて考える必要がありますし、その点で教育学研究科・教育学部は大きな役割を果たすことができるように思います。（HN）



## 京都大学教育学研究科 ・ 教育学部広報委員会

- 委員長 角野 善宏 教授（臨床心理実践学講座）  
委員 前平 泰志 教授（教育学研究科長・教育学部長）  
委員 南部 広孝 准教授（比較教育政策学講座）  
委員 山名 淳 准教授（教育学講座）  
委員 吉井 晃 事務長  
委員 谷川嘉奈子 総務掛長  
委員 中尾 知里 教務掛長

事務担当

教育学研究科・教育学部総務掛  
TEL 075 (753) 3000